

家事労働の行方

——「義務」と「自発性」の間——

山田 昌弘

I 家事の社会学的理論

1. はじめに

「家事の大変さは、家族によって違う」

この論文のきっかけは、この当たり前と思える事実気づいたことから始まった。同じ3食昼寝付きの専業主婦といっても、新婚家庭で部屋をきれいに飾るとかおいしい手料理を作ること忙しい主婦と、子供を何人も抱えながら寝たきりの姑を世話する主婦の家事の大変さは雲泥の差がある。

例えば、職業、収入や威信が同じレベルの夫をもった専業主婦であっても、その家族が一方が夫婦2人のみの世帯で家事労働がほとんどない場合と、子供と寝たきり老人を抱えて膨大な家事労働をこなす場合では、家族の生活条件に大きな差が出る。もし、外での仕事で、同じ賃金にかかわらず、仕事量が異なっていれば、そこには、「おかしい」とか「不公平」というような感情・意識が発生し、何らかの行動を起こすか、何らかの措置がとられるよう期待するだろう。つまり、公的な問題となる。しかし、家族の不平等の場合は、「不運」とか「しかたない」、もしくは「愛情がある・ない」といった理由で、個人的な問題として私的に処理されてしまう。

家事労働の量が各家族によって異なるという事実がどのような社会構造によって決まり、どのような論理によって支えられているのだろうか？ この論文では、次の2つの点を明らかにすることによって、家事労働の実態を知る手がかりをつかみたいと思う。

①「家事労働」は、いかに配分されているのか？ マクロ的に社会は、どのような家事労働を、誰に、どれだけすることを要請しているのか？ 社会の家事労働（再生産労働と呼ぶこともできよう）の遂行されるメカニズム、配分構造の分析。

②「家事労働」は、人々にどう意識されるのか。現実に家事労働を行う人が、どのように感じるのか、感じることを要請されているのかの分析。

家事労働の分析、特に家事がどのように配分されているかの分析に関しては、社会科学の分野で十分になされてきたとはいえない。それは、単に家事が無視されてきたというよりも、近代社会における家事そのものの性格のなかに、分析を受けつけないものがあると考えられる。それは、家事を労働の一種と考えることに対する抵抗感（上野〔1982〕参照）、家事を「私的」で情緒的なものと考える感覚、そして家事を他人と比較することに対する違和感など、が日常感覚のなかに埋め込まれているからだ。家事の分析を阻んでいる近代社会のイデオロギーを明らかにすることがこの論文の課題のひとつである。

家事分析を始める前に、家族社会学の役割論とマルクス主義フェミニズムという先行する家事分析の方法を検討し、何が家事分析を阻んでいたかをみていこう。

2. 家族社会学の役割論

最初に、伝統的家族社会学、特に、構造機能主義のなかで培われた役割論のなかで把握された

「家事」分析を検討してみよう。

家族社会学の第1の関心は、「夫—職業、妻—家事」という家族内の性別役割分業にあった。パーソンズが、手段的役割—表出的役割の概念を使用して、性別役割分業を肯定的に説明して以来〔Parsons 1956=1970〕、夫婦間の仕事と家事の役割配分の実態とその合理性の説明に関心が集中した。1960年代以降、女性の就労率が高まるにつれ、パーソンズの役割配分論に批判が集中し、夫婦ともに職業、家事を分担する「対称的家族」が志向されたり〔Young & Willmott 1973〕、役割配分のメカニズムを性別と切り離しライフスタイルの問題に置き換えたりする議論〔渡辺 1975〕が出てきた。しかし、どのように修正されようとも、2つの問題点から構造機能主義的役割理論は逃れられない。

- ① 家事が家族でしなければならない役割であること自体を問題にできなかったこと。

役割理論は、家族に一定の役割期待が存在することを前提として議論を進め、その役割期待が家族のなかでどのように配分されるかを分析、もしくは問題視する。近代社会のなかで、家族に一定の「家事」という役割が配分されていること自体に対し十分に検討が加えられていない。

- ② 家事役割の主観的意味を問題にできなかったこと。

役割理論では、家事をすることと、仕事をするを、家族の維持に必要な「役割期待」として同列に扱っている。役割期待に沿った役割が誰かによって遂行されればよいわけで、役割取得や役割遂行にあたって本人がどのように感じるか、外での職業役割とどのように違うかということ进行分析できない。家事労働や仕事が主観的にどう位置づけられているかという問題に対して答えることができない。

3. フェミニズム理論における家事

フェミニズム理論、特に最近のマルクス主義フェミニズムの流れをくむ論者は、家族社会学が捉えきれなかった問題を主題化することに成功した。

まず、Smith, Paul は「再生産」を手がかりに、

家事労働が市場の外にあるが、資本主義の再生産に不可欠な労働であると位置づけた〔Kuhn & Wolf, 1978=1984, p. 179〕。つまり、家事が家族（特に女性）に課されていくメカニズムを主題化した。ただ、再生産過程が家族に押しつけられていることを強調するあまり、人々が、家事に主観的に意味付与している側面（楽しいとか、愛情など）を軽視しがちなのは否めない。

次に、最近のフェミニズムの論者たちは、家事労働の性格それ自体が、家事と女性を結びつけているメカニズムを主題化した。女性が家事の担当とされるのは、単に（仕事と同じように）ある役割セットを取得するということではない。家事労働に与えられている性格「私的性格」〔Oakley 1974=1980, p. 4〕と女性に与えられている性格「私的存在」〔江原 1988〕という近代社会が与えた2つの規定が、女性が家事労働を行うことを必然たらしめるのだ。フェミニズムは、当然のことながら女性が私的存在であることの分析に中心を置きがちで、家事労働自体の私的性格に関しては、十分な分析が加えられてこなかった。

II 家事労働の性格

1. 近代社会の家事労働の基本的性格

まず、近代社会で家事労働がどのような性格をもっているかをみていこう。

近代社会の家事労働は、次の3つの社会的規範によって支えられている。

- ① 家族は、一定の生活水準の確保に関して、責任をもちあっている。それは、規範的に「義務」として要請されている。
- ② 一定の生活水準を確保するための活動のうち、家事労働ですべきこと／しなくてもよいことが規範的に決まっている。
- ③ 家事労働など家族のなかで生じることは、私的な性格をもっており、「自発的」に行われることが要請されている。

これらの社会的要請が組み合わさって、社会の維持に必要な「家事労働」の供給が保証されるが、同時に、互いに矛盾して、さまざまな家族問題を

引き起こす原因となっている。まず、この3つの規範を検討していく。

(1) 家事労働が行われる範囲

社会科学では、家族は、生活の単位とか労働力の再生産の場などと性格づけられてきた。近代家族の特徴的な規範を社会学的に述べれば、「家族とみなす人々の一定の生活水準の確保について責任を負う」と表現できよう。もちろん、この規範は、「家族とみなさない人の生活に関しては責任を解除する」という、市場社会の規範の裏返しである。近代社会では、困っている家族を助けないわけにはいかないが、困っている他人を無視しても構わない。この規範は、家族以外の人に対して、家事労働としてサービスを供給する責任を解除する機能をもっている。

自分を含めた家族の生活の確保のために、次の2つの手段がある。

① 商品（物材、サービス）の市場での購入、調達

② 家事労働による物材、サービスの直接供給
家事労働は、不特定多数の人に対して行われるわけではない。家事労働は、「家族とみなしあう人々」の間で行われ、家族とみなさない人に対しては行われない。家族は、一定の生活水準を確保する共同責任をもちあった単位として現れる。家事労働は、生活水準を確保するひとつの手段である。

ただ、この家族という単位は、一定の相互作用が恒常的に行われているような「集団」ではない。ある個人にとって、主観的に家族と思う範囲が家族として現象する。家族とみなす範囲は、潜在的に存在しており、生活水準の共同責任の意識をもっている。ほとんど接触のなかった別居している親と子が、何かの危機をきっかけにして援助活動が行われるのは、主観的に家族とみなしているからである。また、ペット動物であっても家族とみなしていれば、ペットの生活の確保に責任感が生じる（現実には家事労働が供給されていれば、家族とみなしているといえるが、逆はいえない。だから、家事労働が行われる範囲と家族を同一視してはならない。家族はあくまで主観的なものだ）。

(2) 家事の内容

家事といって普通思い浮かべるのは、炊事・洗濯や子供の世話などの活動だろう。

理論的にいってしまえば、家事労働固有の内容があるという意識は幻想であり、イデオロギーである。どうしても譲り渡すことのできない家族の機能というものは存在しない。家族でなされているあらゆることは、家族の外でもなされ得る。

「生殖」という家族固有の活動としか思えない活動も、体外受精や代理母の例にみられるように市場労働として、商品化され代価を伴った労働として行われることも可能であり、現実には存在している。性交渉も商品化されていることは公然の事実だ。そう極端な例でなくても、子供をあやすことなど、家事としても市場労働（保育園、ベビーシッター）としても行うことができる。家事の典型である掃除、洗濯、炊事ももちろん、家事としても、掃除代行業、クリーニング業、コックなど市場労働として行うこともできる（家族の立場からいえば、洋服を買うように、商品化されたサービスを買うことができる）。

家事労働は、内容で定義できない。近代社会において、家族のなかで行われる有用労働すべてが家事労働である。あるニーズを充足する場合、家族で直接行われれば家事労働であり、市場から貨幣で購入して行われれば家事労働ではない。ある家族で行われる家事労働の内容と、別の家族で行われている家事労働の内容は異なる。ある家族は、代理母契約によって、子供の出産を市場で調達する代わりに、子育てを家事労働として行うかもしれない。ある家族は、出産は家事労働として行っても、ベビーシッターを雇って子育て労働力を購入するかもしれない。

確実に存在しているのは、①家族ですべきだと思われる活動と、②家族でしなくてもよい活動を分けている「社会的規範」のほうだ。近代社会に普遍的なのは、家事固有の活動があるということではなく、家事すべきか、家事ですべきでないかという「対立項」のほうだ。家族ですべきだという活動の内容は、時代により、階層により、文化により、地域により異なる。生殖

活動や子育て、老人介護などは、家事労働ですべきだとされるケースが多く、物の生産は、家事労働として行わなくてもよいというケースが多い。しかし、一時代前の上流階層では、子育ては乳母を雇用して行われるのが「規範」だったのであり、家事労働の内容を一定の性質を帯びたものと固定化するのには危険が伴う（それでも、子供を育てるという責任は、その子を家族とみなす人にかかっていることはどちらの場合も同じだ。責任をもつということと、実際に誰が行うかは別の問題だということに注意しなくてはならない）。

また、家事労働の内容を規定する「規範」は、現実には家族で行われている活動と一致しているわけではない。例えば、子供は家族で育てるべきだという規範があっても、現実には保育園に入れる人が多いかもしれない。規範レベルの家事の「内容」と、①家族で行われることが多い活動、②家族で行われることが少ない活動という「実態」レベルのずれが問題として現れる。この点は、家族問題を考える際に重要となる。

（3）家事労働の私的性格

2つの側面から家事労働の私的性格をみていこう。

1) 市場労働と比較した家事労働の特徴

近代社会の市場労働との対比によって、家事労働の性格が明らかになる。市場での賃労働では、①代価が何らかの形で支払われる。②労働の質、量が計算される。③競争がある。マルクスが指摘したように、労働は「商品」として扱われる。

家事労働は、まず①代価が支払われない。これは、マルクス主義フェミニズムの「家事労働に賃金を」の主張、イリイチの「シャドウワーク」論、ボウルディングの「贈与」経済論などで展開されている。外からみた場合、夫の稼ぐ賃金と妻の家事労働の関係など交換のように見える現象もある。しかし、その場合でも当人同士は、交換と意識しているわけではなく、互いに家族としての責任をもちあっているだけだ。

次に、②家事労働は計算されない。代価が貰えないのだから、長時間しても短時間で済ませて、料理に凝ろうが手を抜こうが、その労働が計算さ

れて客観的に評価されるわけではない。主観的に、うまい、まずいという評価はあるが、それは「私的」関係によって決まるもので、市場社会の金銭に換算された評価ではない。

最後に、③家事労働は競争にさらされない。Smith, Paul がいうように、家事労働は交換されないのだから、市場による調整を受けない〔Kuhn & Wolf 1978=1984, p. 185〕。それゆえ、クビになることもなければ、勝手にやめることもできない。

2) 動機づけの問題

市場労働は、明らかに「功利的」動機づけによって行われる。得ならする、損ならやめようとする。しかし、家事労働は、損得に関係なく、「その生産物である労働力がまったく売れないときにもなされる」〔Smith 1978=1984, p. 185〕。なぜなされるのか、動機理解の立場から論じてみよう。

まず、自分自身に対して行う家事労働は、「生きていくために必要」（資本主義側からみれば自分自身の労働力の再生産になっている）という動機で行われるとあってよい。それゆえ、明示的な動機づけは必要ない。しかし、家事労働の中核は、他の家族員に対して行われる有用労働だ。自分では身の回りのことができない子供や老人、病人、障害者に対する世話、そして、長時間市場労働を行うために、自分の身の回りのことをする余裕のない人の世話など、「他の家族が生きていくのに必要」（資本主義システムからみれば次世代の再生産になっている）な労働が家事労働として行われる。もちろん、生きていくというのには、単に生存を営むだけではなく、普通の生活をするという意味であり、時代、階層、文化などにより、その中身は異なる。

「他の家族が普通に生きていくのに必要な労働」の動機は、積極的には「愛しているから」「好きだから」ということに帰着するだろう。母性愛や夫婦愛を典型とした情緒的動機づけが働いていると考えられる。しかし、愛情がさめた夫婦間、喧嘩をしている親子、嫌いあっている姑と嫁の間でも家事がなされることをどう解釈したらよいだろう。その場合でも、家族とみなしている限り、「か

わいそうだから」とか「他にやる人がいないから」とか「仕方がないから」といった理由で納得する。どちらの場合でも、積極的にしる消極的にしる、情緒的動機づけが働いていると考えられる。

そして、家事が情緒的動機づけでなされるという人々の間の了解が、家事労働を「私的なもの」、「あって当然」、「いくらでも出てくる」、「自発的なもの」と意識させる根拠となっている。

2. 家事の二重性格

以上の考察から、家事労働は二重の規定を受けていることが分かる。

① 家事規範（家事として行うべきとされる活動）の要請に従って行うべき「義務」

つまり、社会によって家族とみなす人の範囲と家事として行うべき内容が規定されていて、家族は義務として遂行する責任を負わされている。

② 情緒的・私的性格をもって、「自発的」に遂行することが要請されている（これも、社会的に要請された規範であることに注意）

つまり、家事労働の内容、量は、必要なものとして社会的規範により要請されるが、家事労働自体は、内発的、自発的に遂行されることを要請される。

ここに、近代家族の家事労働に対立した評価がつきまとう原因がある。

オークレイは、イギリスの主婦に対する家事調査で、家事には、2つの相反したステレオタイプ化されたイメージがあることを確かめている。一方には、「くだらない、つまらない、自己否定的な」イメージがあり、他方には、「創造的で余暇的」なイメージがある〔Oakley 1974=1980, p. 46〕。

また、上野がまとめた「主婦論争」をみても、その中心には、家事に対する2つの見方が常にあることに気づく。一方で家事が「押しつけられている」、「無給の仕事」といった意見がある一方、家事は自由な楽しい仕事とみる意見もある。

社会的規範に従って要請されているという側面を強調すれば、つまらない仕事となり、自発的に情緒的に行われる（それも社会によって要請され

ているが）側面を強調すれば、楽しい、人間的な仕事となる。

ここでは、どちらの要請（イメージ）が家事の本質かを議論するところではない。この家事に与えられた2つの要請が、家族の家事労働の配分、家事の「大変さ」にどのようにかかわっているか、そして、その大変さが主観的にどのように意味づけられるかを検討しよう。

III 家事の不平等配分

1. 家事の需要・供給のバランス

家族では、お互いに生活に責任をもちあっており、同時に「家事で供給すべき」ニーズの内容が社会的に決まっている。それ以外の財・サービスは市場で購入しても、家事で行ってもよい。この家事ですべき内容の規範が存在していることが、問題を複雑にしている。

<家事と需要と供給>

家事労働で満たさなくてはならないニーズは、家事労働で供給すべき内容の規範が一定だとすると、家族とみなしあう人々（とりあえず、家族員と呼んでおく）の人数と状態によって決まる。

掃除や洗濯、食事の用意などは、家族員の「人数」の関数ということができよう。まとめることが可能で、家事の需要は、人数に比例して増大する。

子供や病弱な老人、その他病人や障害者など、自分で自分の面倒をみるのが身体的に不可能な家族員が存在すると、その人たちを注意して見守るという行動自体が家事労働の一部を構成する。このような弱者の世話、家事の需要を飛躍的に増大させる。それは、具体的な家事労働の量が多くなるだけでなく、長時間目を離すことが、弱者の身体的生存を脅かし、苦痛や不快を与える可能性があるために、「いつも」誰かが見守る（気遣う）必要がある（正確には、規範が存在する）。弱者が1人いるだけで、社会規範は、弱者を常時見守る労働（家事労働に指定されているケースが多い）を要請する。

一方、家事の供給は、家事に振り向ける時間が

どれだけあるかによる。身体的に健康で家事専門の人が何人いるか、家事専門でなくても仕事や学業や休息にとられない時間がどれだけあるかによって決まってくる。

＜家事の大変さ＞

家事ニーズの需要と家事労働の供給力の組み合わせで、家事の需要・供給のバランス（大変さ）の類型を考えることができる。

	家事労働の需要	家事労働の供給
㉑	小	小
㉒	小	大
㉓	大	小
㉔	大	大

㉑の場合は、例えば、夫婦2人の家族で家事の需要は少ないが、フルタイムの共働きで家事に充てる時間も少ないものが典型だろう。

㉒の場合は、夫婦2人の家族で家事の需要が少なく、かつ、専業主婦で家事に充てる時間が多いケース、子供が大きくなり家事を手伝うようになった家族のケース、などが考えられる。

㉓の場合は、手のかかる子供や寝たきりの老人がいながら、夫婦共仕事に出ているようなケース、母子家庭などが考えられる。

㉔の場合は、手のかかる子供など弱者がいても、専業主婦がいる。同居の親が家事を手伝ってくれるといったケースがある。

㉑の場合は、家事労働の供給過剰、㉒、㉔の場合は、需要と供給が釣りあっているケース、㉓の場合は、需要の過剰といえる。家事の大変さは、この逆の順番で増える。

次に問題にしなければならないのは、①家事労働の需要と供給量は、どのようにして決まるかという家事のシステムの側面と、②需要と供給のバランス（大変さ）は、主観的にどのように経験されるかという家事の主観的側面である。順番に検討していこう。

2. 家事の不平等分配

1項で示した家事の需要と供給がどのように決まるかを考察する。その前に、家事ニーズを考え

る際の留意すべき点を挙げておこう。

現実には、家族の境界は曖昧で、家族とみなせるような、みなせないような中間領域（例えば、近居する親夫婦と子夫婦）が存在し、かつ、個人によって家族とみなす範囲が異なる場合がある。例えば、妻は、別居している自分の母親を家族とみなし、その生活水準に関心をもつが、夫は家族とみなさない場合もある。それゆえ、常に客観的な家事労働の単位が抽出できるかどうかは保証できない。ここでは、夫婦を中心に置いて、近代家族に典型的に現れるケースを例にとって論じよう。

＜家事ニーズの不平等配分＞

まず、家事労働により充足されるべきニーズは、①夫婦のライフコースの各時点で異なる。新婚当初のニーズは少なく、子供が生まれた時点で量が増え、子供の自立とともに減少する。同一家族でも、時間とともに変化する。次に、②上の世代（親など）との関係に影響される。具体的には、同居・別居（死別）、および親の状態によって異なってくる。同居の場合、両親が健康であれば、家事ニーズは、単純に数だけ増加するだけだが、身の回りの世話が自分でできない状態に陥ると、家事ニーズは極度に増大する。次に、③下の世代との関係。子供の数によって家事ニーズは異なる。子供は、ある時期までは、身の回りの世話が自分でできない、つまり家事ニーズを自分で満たせない存在とみなされることが前提となる。最後に、④病気や障害など不慮の事態によって影響される。

夫婦にとって、①は時間の経過とともに多くの家族が経験する家事ニーズの変動である。しかし、②③④は、同別居の「規範」の強さの有無や（規範的要素）、きょうだいの数や、きょうだい上の地位、病気・寝たきり、ぼけになるかならないかという「偶然」（偶然的要素）、および、子供を欲しいかとか、親と住みたいかという情緒的要素に左右される場合が強く、自分たちの選択や努力により決まる要素が少ない（せいぜい、子供の数の計画くらい）。時間を止めることはできないし、規範を破るとサンクションが加わるし、きょうだい上の地位を変えることはできない。生まれた子供をなかったことにすることもできない。家事ニ

ーズは、家族にとって所与のものとして現れる。一度与えられたら、そのニーズを勝手に変更したりすることはできない。

＜家事労働力の供給と需給バランス＞

夫婦ユニットを前提にすると、家事労働力の供給は、夫婦の就労状況に大きく影響される。夫の仕事の忙しさや、妻の就労形態により家事労働にさける時間が異なってくる。近代社会では、市場労働の責任者とみなされる男性よりも、家事労働の責任者とみなされることが多い女性の労働のほうか、ある程度調節がきく。夫の家事労働力は、仕事の状況の従属変数的なところがあり、妻の家事労働力はある程度、「可変的」となる。しかし、妻の家事労働力が可変的だとしても、家事ニーズが増大したからといって、家事労働を増大させることができるとは限らない。通常、家事ニーズ、特に弱者のケアのニーズが増大すると、同時に市場ニーズも増大するからだ。例えば、子供の数が増えると、面倒をみる時間が増える一方、子供にかかるさまざまな費用も増大し、市場労働の必要も増す。

また、就労状況は、夫婦のライフコースによって左右されるし、病気といった偶然的要素にも左右される。子供の面倒をみてくれる祖母など、夫婦以外の家事労働力は、偶然的、規範的要素に左右される。

このように、家族では、家事ニーズとは無関係に家事労働力が決まってくる。家事ニーズが多い家族に家事労働力が多いとは限らない。それゆえ、家事ニーズと同じく家事労働力も不均等に家族に配分されているということが出来る。

3. 家事の不平等配分の問題

家族には、家事ニーズが不平等に配分され、同時に、家事労働力も不均等に配分されている。これがどのように主観的に家族（特に主たる家事労働担当者である女性）に経験されるだろうか。家事ニーズと家事労働力のアンバランスが、直接、家族問題となるわけではない。個人の主観的意味付与を経由して、初めて家族問題となる。そして、家族の行動に対する「私的」意味付与という近代

社会の規範が、家族問題化を抑制している様子をみてみよう。

まず、家事ニーズが家事労働力の限界を超えているとき、家族問題が発生する。通常、母子、父子世帯や老人のみ世帯などに多く発生する。この場合、市場からしろ、公共福祉からしろ、家族の外部の手を借りて、ニーズの充足を行い、「家族で行うべき活動」という規範から逸脱せざるを得ない。例えば、老人ホームやベビーホテルの利用や、全食事を外食するなどが考えられる。その際、たとえニーズが充足されたとしても、ニーズの受け手には強い「剥奪感」、ニーズを充足できなかった家事労働の担い手（女性の場合が多い）には強い「罪責感」が生じる。それは、家事ニーズは家族によってでしか十分には充足できないという感覚、つまり、「代替不可能性」の規範から逸脱するからだ。「家族にしてもらえなくて寂しい」とか、「家族としてやってやれなくてかわいそうだ」という経験が生じる。それゆえ、このような家族問題は「例外的」な不幸な事態とみなすことを要請される。つまり、たまたまふりかかった私的な災難（死別、離婚、老人のみ、病気など）が原因と意味付与することによって、規範からの逸脱を正当化することができる。

次に、家事ニーズが家事労働によって充足されている場合でも、家族によってその大変さにはアンバランスが生じている。ある家族は家事労働力が余り、ある家族は家事ニーズを充足させるために相当量の家事労働をこなす。人々は、客観的な家事労働の不均衡をどのように経験するだろうか？

Ⅱ節2項で述べた通り、家事労働は、義務であると同時に、「自発的」になされるものとされている。家事労働—愛情表現と意味付与できる限り、言い換えれば、愛情という動機づけにより家事労働が行われ、愛情が経験できる限り、不均衡は表面化しない。家事ニーズの達成が、どんなに量的に少ないものであっても、多いものであっても、その水準達成は、「愛情」をもたらず。例えば、金持ちの夫の専業主婦として楽に子供を育てても、苦勞してこの子のためにと働きながら子供を育て

ても、「この子を育てるのは私しかできない」という感覚が家事労働の遂行を支える。

家事労働に対する苦勞や不満は、「愛情がない」「人間的ではない」という意味が付与されがちである。つまり、家事労働のアンバランスは、個人の「自発性」の問題として私的に処理されてしまう。

IV 現代社会と家事の行方

この節では、近代の家事労働の変遷を概観し、最後に家事労働の行方を占う。

1. 近代社会の家事労働システム

いわゆるわれわれが通常の家族形態と考える「近代家族」は、19世紀の欧米ブルジョワジーに起源をもっている。そこで、2つの重要な規範が形成され、近代の家事労働のシステムが確立した。ひとつは、家事労働すべきものと家事労働でなくてもよいものを分離する規範で、もうひとつは、家事労働の担当者として女性を想定した規範である。

まず、家事ニーズが日常的な身の回りの活動と子供など弱者の世話に規定されたことは、重要な意味をもつ。18世紀までのブルジョワ・貴族など上流階層は、経済的余裕があれば、家事使用人や乳母を雇い、日常的家事や弱者の世話をいわば「市場労働のサービス」を買うことによって行っていた。18世紀末から、自分の子供は母親が育てるべきという思想的運動が起こり、乳母や家事使用人を排除し、子育てを中心とする家族が形成された。その理由は、子供は愛情をもって育てられなくてはならないというイデオロギーに基づいている。つまり、愛情をもって子供を育てることが「義務」として強制されたのである。しかし、同時に「母性愛」の規範が形成され、子供を愛情をもって育てることは、女性にとって「本能的」「自発的」なものとされた。女性は、「慰めの天使」として自発的に子供を育てることを要請された。

子供の世話を中心として、炊事・洗濯など日常

的家事・夫の世話などが家事労働として自発的に行わなくてはならないものとして分離していく。そこで「妻であり、母である女性が、自発的に、愛情をもって夫や子供の世話をする」専業主婦が成立し、近代家族のモデルとして徐々に全階層に普及していく。日本でも、大正時代の都市サラリーマン家族に近代家族の萌芽がみられ、第二次大戦後、全階層に愛情をもって家事をする専業主婦が普及していく。その普及の前提として、専業主婦でいられる程度の賃金（生活給）を男性労働者が得るようになるという賃金水準の上昇があったことはいうまでもない〔Smelser 1968=1974, pp. 110-120〕。

まとめておこう。近代家族では、

- ① 子供を育てることを中心として、掃除、炊事、洗濯など日常的サービス活動が「家事労働」としてしなくてはならない義務的活動として規範化された。
- ② 規範化された家事労働は、自発的に愛情表現活動として行われることが規範化された。
- ③ この義務と自発性を矛盾させないために、情緒的で私的な存在である女性が想定された。

2. 現代化と家事労働の変化

「弱者の世話や日常的な身の回りの世話を行う専業主婦」という近代の家事労働のシステムも、先進資本主義諸国では、1960年代を境にして崩れ始めてきた。上野千鶴子は、女子労働が資本制に回収されていくという視点から「家事と市場の再編」を捉えたが〔上野 1985〕、ここでは、家事労働の意味の変化を中心に論じてみる。

(1) 市場領域の拡大

資本主義の高度化が、家族に与える最大のインパクトのひとつが、市場領域の拡大だろう。市場と家族を分けている規範、つまり、「家事労働ですべきものと家事労働でしなくてもよいものを分けている規範」を超えて、市場領域が拡大している。

まず、市場領域の家族への進入は、家電製品（洗濯機、掃除機、調理用具など）の導入で始まる。日本では、家電製品の数、家族生活水準の

指標とする意識が長い間あった。もちろん、これらの道具を使用するのは、家事の主たる担当者である専業主婦であるが、市場領域からお金で買ったもので、家事を合理化し時間を節約するという意味で、一種の「代替」の機能を果たしている。

次に、日常的家事サービスの市場化での購入が拡大する。調理でのレストランや調理済み食品の利用、洗濯でのクリーニング店の利用など資本制の発展に伴い、市場でも購入可能なサービスが増大し、より安価で購入できるようになる。

最後に、弱者のケアの市場による代替も可能とみなされるようになってきた。例えば、ベビーシッターや介護人を雇用することもできるようになってきた。

このように、市場の拡大は、「家事ですべき活動」という規範を揺るがす。もちろん、「食事は手料理で作るべきだ」とか「子供は常に母親が側にいるべきだ」とか「紙おむつは子供にとってよくない」という規範側からの抵抗も強い。弱者、特に子供のケアを市場化することには強い抵抗感がある。しかし、生活水準の上昇という現実の必要が、家事を合理化し、市場化することを推し進めているため、「家事で満たすべきニーズ」は縮小していく。

(2) 家事労働の分裂

「家事ですべきとされたニーズ」が、市場で購入してもよいという規範に転換したとしても、家事労働でそのニーズが満たされなくなるわけではない。市場で購入してもよいし、家事労働で充足してもよい「ニーズ」が出現する。食事は、レストランでしてもよいし、家で作ってもよい。クリーニング店に出してもよいし、家でアイロンかけをしてもよい。すると、家事労働としてなされてきたものが、2種類のものに分裂する。市場で代替してもよいニーズを満たす家事労働と、市場で代替できないニーズを満たす家事労働に、意識の上で分裂する。例えば、子供を預けて働きに出る母親が、短い子供との接触時間を濃密に過ごす場合などは、誰でも満たせるニーズと母親でしか満たせないと思っているニーズを分け、後者のみに「情緒的意味」を付与している。また、普段は

できあいの食事を作るが、休日になるとシェフまがいの料理を作る場合なども、市場でも代替できる調理と、愛情を込めて作る「趣味的」な料理を、同じ家事でも別の意味をもった活動と意味づけている。あるニーズの一部が市場でも代替可能になると、残りのニーズが「家族だけしか満たせない、情緒的意味をもったニーズ」であることが強調されがちである。

3. 現代社会の家事労働の行方

最後に、2項で述べた現代社会の傾向、市場の拡大と家事の分裂は、「義務であると同時に自発的に遂行される」という家事労働の原則を破壊する。それが引き起こす問題点を指摘しておこう。

(1) 家事の不平等性の拡大

まず、Ⅲ節2項で指摘しておいた近代社会の家事の不平等性が、現代社会において拡大する傾向があることを2つの点で指摘しておこう。

市場領域の拡大により、日常的な身の回りの世話のニーズ（炊事、洗濯、買い物、掃除など）の遂行は、相対的に楽になる。家電製品の導入により、より短時間でより楽にニーズの充足が可能となり、市場で購入して満たしてもよいニーズ（食事、洗濯など）を購入して充足させることも可能になった。しかし、弱者の世話のニーズ（特に子供の世話）は、家族でしか満たせないという規範が強いのと、現実には市場化されて購入できるようサービスが少ないこと、さらには、市場化されていても高価なことなどにより、市場による代替が進みにくい。加えて、生活水準の上昇が、弱者のケアのニーズを押し上げる。軽減される身の回りのニーズは、全家族に共通に存在しているニーズなのに対し、相対的に軽減されない弱者のケアのニーズは、不均衡に配分されている。相対的に、弱者のケアのための家事労働の比重が増し、家族間の不均等性が増大する。

次に、市場領域の拡大により、「お金」の需要が増大する。家電製品を導入したり、市場で購入するためには、「お金」が必要となる。需要に対応するために、女性が就労して家計補助をする必要がある家族が出てくる。Sokoloff が指摘したよ

うに、女性は家庭責任を全うするために外で働かざるを得ないという状況が出てくる〔Sokoloff 1980=1987〕。すると、女性が外に出るために代替せざるを得ない家事ニーズの購入が必要になるというように、相乗的に家事ニーズの市場への代替が進行する。すると、家事の大変さは、市場で得てくる「お金」の量に反比例する状況が生まれる。収入の多い夫の妻の家事労働は、より楽になり、収入の少ない夫の妻の家事労働はより大変となる。市場における賃金の不平等が家族にももち込まれる。

(2) 家事労働の動機づけの危機

Habermas は、現代社会において、プロテスタント的労働倫理の枯渇により、市場での労働の動機づけが危機的状況に陥る可能性を論じたが〔Habermas 1973=1979, p. 118〕、同じようなことが家事労働の分野でも起きつつある。

家事労働の動機は、Ⅱ節2項でみた通り、情緒的に意味付与できることにあった。自発的に行われることが規範化されているために、無償で遂行され、不平等に配分されていても社会的な問題にならず、「私的」なものとして処理されてきた。

しかし、家事が分裂し、市場で満たしてもよいニーズを満たす家事労働というケースが出てくると、情緒的な動機づけが消失しがちとなる。なぜなら、それは「お金があればやらずに済む労働」だからだ。誰がやっても同じだから代替可能性の感覚は消失する。しかし、家族として市場での購入か家事労働を行うかして満たさなくてはならないニーズの責任は変化しない。

一方、情緒的に自発的に行われる家族での行動は、ますます、生活水準の確保のためのニーズ充足から遊離する。趣味的家事や家族そろってのレジャーや家庭団欒などのコミュニケーションなど、市場で代替できないと思われる活動、それゆえ、ニーズを充足させる家事労働とは別の活動が、家族の中で求められる（その上、このような活動は金がかかる）。

この事態は、「義務」としての家事の側面を強く意識させる。上野千鶴子が述べるように「なぜ、子育てのような責任を引き受けなくてはならない

のか」という疑問が生じてくる（「自発的」に行われるのは子供と遊ぶことであり、子供の世話をすることは情緒的意味付与が低下する）（上野が指摘するヨーロッパでこの感覚が強く、日本でこの感覚が弱いのは、日本では、子育ての情緒喚起力がまだ強いからだと思われる。〔上野 1985〕）。

(3) 家事労働力の再編成の必要性

Ⅲ節3項で述べた通り、近代社会では、家事ニーズが不平等に分配されているという事実は、主観的には、「情緒的」「自発的」になされるという理由で、私的に処理されてきた。家事労働に対する不満が公的な問題になる回路は存在しなかった。

従来も「福祉」という形で、家事ニーズを充足できない家族に対し、公共体からの援助が行われていたが、あくまで例外的な措置であり、本来、家族で充足すべき物をやむを得ず肩代わりしている意識が強かった。老人問題にせよ、保育所にせよ、問題のある家族に対する例外的な措置となされてきた。

しかし、いくつかのニーズが家事労働でなくても充足できるという意識が広まると、「大変な」家事労働をしている（ニーズは充足されているがその家事労働の負担が大きい）家族の不満が社会問題化する。誰がやってもよい家事を人任せにし、情緒的な、そして自発的にやりたくなる活動だけを家族でやっていたいという欲求が生じる。ここに、家事労働力の再配分の必要が生じてくる理由がある。

参考文献

- Aries, Phillippe, 1960, *L'enfant et la Vie Familiale sous L'Ancien Regime*=1980, 杉山光信, 恵美子(訳)『子供の誕生』, みすず書房
- Boulding, Kenneth E., 1973, *The Economy of Love and Fear*=1974, 公文俊平(訳)『愛と恐怖の経済』, 佑学社
- Duden, Barbara, 1977, "Arbeit aus Liebe-Liebe als Arbeit"=1986, 丸山真人(訳)『資本主義と家事労働の起源』丸山真人(編訳)『資本主義と家事労働』, 岩波書店
- 江原由美子, 1988, 「フェミニズム理論への招待」『フェミニズム入門』, 10-24頁, JICC
- 江原由美子(他), 1989, 『ジェンダーの社会学』, 新曜社

- Habermas, Jürgen, 1973, *Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus*=1979, 細谷 (訳)『晚期資本主義における正統化の諸問題』, 岩波書店
- Illich, Ivan, 1981, *Shadow Work*=1982, 玉野井芳郎・栗原 (訳)『シャドウ・ワーク』, 岩波書店
- Kuhn & Wolf (eds.), 1978, *Feminism and Materialism*=1984, 上野 (他訳)『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁草書房
- Oakley, Ann, 1974, *The Sociology of Housework*=1980, 佐藤, 渡辺 (訳)『家事の社会学』, 松籟社
- Parsons, T. & Bales, R., 1956, *Socialization and Interaction Process*=1970, 橋爪貞雄 (他訳)『核家族と子どもの社会化(上)(下)』, 黎明書房
- Shorter, Edward, 1975, *The making of the Modern Family*=1987, 見崎 (他訳)『近代家族の形成』, 昭和堂
- Sokoloff, Natalie, 1980, *Between Money and Love*=1987, 江原 (他訳)『お金と愛情の間』, 勁草書房
- Smelser, N. J., 1968, *Essays in Sociological Explanation*=1974, 橋本 (訳)『社会変動の社会学』ミネルヴァ書房
- 上野千鶴子, 1985,『資本制と家事労働』, 海鳴社
- 上野千鶴子 (編), 1982,『主婦論争を読む I II』, 勁草書房
- 山田昌弘, 1986,「家族危機と家族政策」『社会学評論』第36巻第4号, 424-437頁
- , 1987,「近代家族形成における情緒の二つの意味」『現代社会学』第24号, 110-132頁
- Young, M. & Willmott, P., 1973, *The Symmetrical Family*
- 渡辺秀樹, 1975「家族における社会化過程について」『社会学評論』第26巻第1号, 30-52頁
- (やまだ・まさひろ 東京学芸大学講師)